

美術館の社会教育施設としての在り方に関する考察

MUSEUM INNOVATION

DAMBA ENKHZAYA, 野村 泰介, 林 玲奈, 矢野 壮一郎

本研究の目的は、市民が積極的に美術館を利用し、美術館が社会教育施設として十分に機能することである。そこで、美術館の利用者数を増加させるアプローチの提案をしたいと考えた。まず送り手(美術館)と受け手(市民)の両方の視点を把握するため、岡山県立美術館の学芸員の方へのヒアリング、学部生向け授業でのアンケート及びインタビューを行った。次に市民と美術館の好ましい関係性を調査するために金沢21世紀美術館への視察を行った。

調査を踏まえて、美術館利用者の増加には美術に対する興味・関心を高めることが必要であると推察し、「みんなでつくるミュージアム」ワークショップを執行した。実践の結果、美術に対する興味・関心には学校教育における美術科の影響が大きいという考えに至った。今後の展望として、学校教育外の美術の存在を市民が認識するためのアプローチの提案及び実践を行いたい。

1. 研究の背景と目的

私たち「MUSEUM INNOVATION」のメンバーは、美術館に対して肯定的な印象を持っている。しかし、美術館を積極的に利用する人は日本の人口から見れば決して多くはない。『社会教育調査/平成30年度 統計表 博物館調査(博物館)』によると、平成29年度の美術館の総入館者数は39,810,965人である。これは、総務省統計局の『人口推計(平成29年10月1日現在) - 全国:年齢(各歳),男女別人口・都道府県:年齢(5歳階級),男女別人口-』で示された日本の人口126,706,000人の約31%に過ぎない。

本来、美術館は利用者を限定することのない社会教育施設であり、人々の共有資産である。知識の有無に関わらず、ほんの少しの好奇心さえあれば誰もが利用できる施設であるはずだ。私たちの目的は、より多くの人々が積極的に美術館を利用し、美術館が社会教育施設として十分に機能することだ。

美術館は、社会教育施設である美術館をより多くの人々に気軽に利用して欲しいと考え、様々な工夫を行っている。一方市民の中には、美術館は格式高く、専門的な知識や芸術への関心等をもつ限定された人々のための施設であるという意識を持っている場合が多く、そもそも興味や関心も無く、足を運ぶという気も起こらない。

このような美術館と市民の現在の関係を踏まえ、私たちは「美術館と市民の間で意識に差が生じていること」が問題であると考えた。

この問題意識から「双方の意識の差を埋めるためのアプローチを考えること」を課題設定した。まず、課題を解決するために美術館の取り組みと市民の持っている美術館像についての調査を行った。

2. 現状調査と課題の再設定

2-1. 岡山県立美術館学芸員へのヒアリング

2020年7月、美術館の市民に向けての活動について調査した。学芸員へのヒアリングでは、障害のある方も子どもも気軽に来ることができるようなプログラムを用意していることが分かった。

例えば、ブラインドトークといった、2人でペアになり1人は視覚を使わずにもう1人が自分の言葉で絵の話をすることによって2人で鑑賞を楽しむプログラムや、子ども向けに大きな模造紙を何枚も貼り合わせた紙に体をいっぱい使って描くワークショップを行っている。

私たちは、岡山県立美術館が行っている対話型鑑賞プログラムを体験した(図1)。このワークショップでは、学芸員の方と1枚の絵について20分ほどかけどのように見えるかどう感じたかお互い話し合いながら鑑賞した。他者の見方、感じ方に触れることで新たな視点を持ち、改めて絵をじっくり見ることによって、より深く鑑賞することができる。1人で美術館に行き絵を見たときと違い共有できるという楽しさとともに、自分自身の見方や感じ方が広がった。

しかしながら、元来美術館に興味のある人には魅

力的なワークショップであるが、そうでない人が足を運ばない限り、その効果を得られないのではないかと疑問を持った。

図1「岡山県立美術館での対話型鑑賞」



2-2. 「地域社会と博物館」受講生への取材

2020年9月～12月に岡山大学で開講された「地域社会と博物館」という授業を実際に観察し、地域社会と博物館をつなげる大学生の育成について考察した。授業は、すべての学部の学生が受講することができ、6学部から12人の受講があった。授業のはじめ6回分は県内の様々な美術館・博物館の視察・学芸員へのヒアリングを行い、残りの6回分では受講生5～6人でチームを組みよりよい美術館・博物館になるための企画提案を考え最終発表会で学芸員に対して提案するという内容であった。

受講生がすべての美術館・博物館の視察・学芸員へのヒアリングを終了時と最終発表終了時にアンケートを行った。アンケート調査では、1回目の調査では7件(うち記述漏れがなかった6件を使用)、2回目の調査では3件の回答が得られた。この2つのアンケート調査からは、この授業を通して受講生は多様な価値観に気づき、美術館への固定概念からの脱却、具体的な美術館の企画参画イメージの創造を得られたと考える。

また、最終発表後に受講生の1人にインタビューを行った。インタビューからは、学芸員の話を受ける貴重な機会を得たこと、価値観の違う人との協同経験、自分なりの美術館の意味を得た一方で、地域社会側のインプットの不十分さやチームとして活動する下地不足が浮き彫りになった。

ここから、この授業の良い点として、ダイバーシティに富んでいること、チーム活動により多様な価値観に触れること、学芸員の話聞く貴重な機会を得たことが挙げられた。一方で、改善点として、地域社会との関係について学ぶ機会が不十分である点や、話し合いの仕方の基礎を作る必要がある点が挙

げられる。

そして、授業で博物館・美術館に対してできることがあることに気が付いているものの、アンケートに答える受講生が少なく、行動変容につながっていないことも示唆された。

2-3. 考察と課題の再設定

調査の結果、そもそも市民の多くは美術館という施設に対する関心が薄く、美術館を他人事のものであると感じているのではないかとことに気付いた。美術館が大衆に対して歩み寄ろうとして試行錯誤している姿勢を知ることができた一方で、市民は美術館に対して受け身であるという印象を得た。

どのようにすれば、市民の美術館に対する意識を変えることができるのか、美術館とは異なる市民への具体的なアプローチが必要ではないかという考えに至り、「人々の美術館に対する関心を高める」という新たな課題設定を行った。

課題を解決するために、人々の関心を高める方法や美術館を利用することのメリット、市民の望む美術館像等について把握することが必要であると判断し、調査として2020年11月、石川県金沢市にある金沢21世紀美術館への視察を行った。

3. 金沢21世紀美術館への視察と考察

3-1. 金沢21世紀美術館の概要

金沢21世紀美術館は2004年開館し、現代美術の収蔵・展示を行う目的で石川県金沢市の中心部、名勝兼六園に隣接する場所にある。建物はガラス張りの円形で非常に開放的である(図2)。



図2「金沢21世紀美術館の外観(夜)」

金沢21世紀美術館は「市民の美術館」を標榜しており、館内には市民芸術交流スペースを設けている。美術館では鑑賞ゾーンと交流ゾーンをコンセプトとして分けており、鑑賞ゾーンを「美術館に行かない人は行かない」、交流ゾーンを「美術館に行かない人も来たことがある」と表現する。

3-2. 「市民が作る美術館」 ミュゼミの取り組み

美術館開館から15年経過した2019年、改めて金沢21世紀美術館について考える機会を市民と共に考える企画が行われた。翌2020年、「ミュゼミ」(museum seminar)と呼ばれる「私たちの美術館」をあらゆる角度から深く考えるための企画が行われた。この企画は20代・30代の金沢市民を対象に行われる連続ワークショップだ。ホストとして金沢21世紀美術館キュレーターの立花由美子氏、ファシリテーターとして、かなざわコミュニティ・コーディネーターの高橋律子氏が担当して開催された。

3-3. 市民の声と美術館の在り方

金沢21世紀美術館では、ミュージアムをパブリックな場にするため、常に「市民の声」を意識しており、集めたものを適宜公開している(表1)。

表1「市民の声(一部)」

応援メッセージ
子どもが生まれたので定期的に行って、子どもに芸術文化に触れさせたいと思っている
美術館の在り方に不満を持つ意見
キッズスタジオの利用時間を午前中にもつくてほしい。1時からではなかなか予定が立てにくいです
もはや金沢市が誇る観光施設となった。地元民としては複雑な心境である。
金沢市民はしっかり税金を払っているのだから年間フリーパス券などの融通を利かせて欲しい
上から見るプールも有料になった少し残念。土日は観光客でごった返し、市民の美術館ではなくなってしまった。
受付の混雑は慢性的であり、来場者の大切な時間を奪っている。

上記の市民の意見から「美術館の来館者が増加すること≠市民のための社会教育施設」ということがいえる。開館して15年経過した美術館について市民が自分事として捉えていること、美術館も常に市民との対話を通して「市民ファースト」の美術館であり続ける姿勢を保っていることから、双方が関心を持ち続けていることがわかる。

3-4. 美術への関心と三度目の課題設定

金沢市21世紀美術館は、美術館と市民が互に関心を持つ事例であった。しかし、金沢市が工芸で発展した地域という背景が市民の美術館への関心の要因であることは否定できない。美術が経済活動に繋がるという認識を市民が持っており、彼らは美術を肯定的に捉えている。私たちは、美術館への関心

以前に、美術館が取扱う美術というコンテンツに対する苦手意識等が美術館への関心の薄さの要因となっていると推察した。

そこで新たに「美術に対する意識改革」という課題設定を行った。この課題を解決するためには、美術に対して親しみを持つことが必要であると考えた。美術が限定的な人々を対象としたコンテンツではないと認識することが美術館の利用に繋がるのではないか、と推察した。課題解決のための手立てとして、参加者の美術への苦手意識が緩和されることを目的としたワークショップの企画を行った。

4. ワークショップの実践

2021年1月に、岡山県岡山市北区奉還町にある教育施設、SGSGのシャッターにおいて、画家ではない人を対象に「みんなで作るミュージアム」ワークショップを開いた。

本ワークショップでは、「アート知識や技術がなくても、表現して、鑑賞し感想を発信しても良いんだ」ということをコンセプトに、アート表現・発信のハードルを下げることにより、アートに気軽に親しむ市民を増やすことを目的とした。具体的な内容は、年齢及び性別等を問わないものの、画家ではない人が描いた絵をシャッターに展示し、更にSNS上(Twitter)で公開した(図3)。



図3「ワークショップの様子」

そして、ワークショップの参加者にアンケート調査及びSNS上でもワークショップに関する感想を収集した。その結果、参加者のアンケート調査では、「普段描く機会がなく楽しかった」「子どもの柔軟な発想を見て、もっと自由に描いても良いんじゃないか」「アットホームな空気ですぐ人と描くのが楽しかった」等といった意見が挙げられた。

一方、SNS上で得られた情報からは、町の中にアートが増えてほしいと思っている可能性があること、美術館に対する関心に繋がる人と繋がらない人が半々である可能性、創作意欲向上の要因とならない可能性があることが分かった。

今回の企画の良かった点として、子どもも大人も対等な立場であり双方が刺激を受けたこと、絵を描

くことが苦手と話していた人も楽しめて絵に対して興味が高まったこと、上手下手など評価を受けないことで学校教育以外の美術とかかわる機会になったことが考えられる。

改善点としては、見るだけでは美術館へ行く意欲は高まらないため効果が薄い、本ワークショップに参加したことをSNSでシェアせず知り合いに話すことだけに留まるということである。そして、そもそも回答数が非常に少なく、多くの人の目に留まっていない可能性があると考えられる。

5. 結論

「美術館は地域に必要なだ」という言説は多い。文化庁の『文化に関する世論調査（令和元年度調査）』において、地域の文化的な環境を充実させるためには美術館などの文化施設の充実が必要であるという回答が最も高い割合を占めている。一方で、美術館に行かない要因として、入館料の価格設定や地理的問題を挙げている割合が高いことから、美術館にその労力に見合った価値を感じていないと判断できる。

また、地域づくりの場面において「文化発信の象徴」である美術館は「あった方が良い」と言わなければいけない雰囲気すら感じられる。私たちは、軽薄な「あった方が良い」ではなく、地域の構成員である個人がそれぞれの立場で美術館が必要かどうかを測ることにより、「地域社会において美術館を必要だと思う個人が増えることにより美術館は真の意味で地域に必要な存在となる」という仮説を立てた。

「美術館を必要としない」と考えるワークショップ参加者へのヒアリングを行った際、「私、絵上手じゃないし、ワークショップとか苦手」「アート見ても感想が言えない」「美術の授業にいい思い出が無い」という回答を得た。これらの回答から、多くの人にとって学校における「美術教育」以外で「美術」と関わる経験がないと判明した。美術アレルギーも美術好きも「美術の授業」から始まる。そのため、「好ましくない(誤った認識による)図画工作や美術の授業」における価値判断やその評価のルールに乗れない人は「美術館を必要とする個人」になりにくい。すなわち「好ましくない美術教育で固定された価値観」から切り離さない限り地域社会の中で人々が「幸せ」に生きるための場としての美術館はあり得ないのである。このような状況は、学校教育における「誤った美術教育」の責任であるともいえる。

但し、美術に興味を持ったからといってすぐさま変化が表出することは減多になく、美術に対する意識改革の明確なメリットを示すことは難しい。しかし、美術に対する興味・関心は、経済的な豊かさ

は異なった精神的な豊かさを人々に与えると考えられる。

6. 今後の展望

地域社会において美術館がその存在価値を認められるようになるためには、「誤った美術教育」が築き上げた「美術とはこうあるべきもの」という固定観念から脱却し、市民が自由な発想でアートに触れる場を意図的に創ることが必要と結論づけた。当チームでは検証のために、1月に実施した「みんなで作るミュージアム」をさらに発展させる「マイアート(仮)」を実践予定である。

この企画は現時点では構想段階だが、「誤った美術教育」により権威づけられたものではない、日常生活で見えにくいものを、自分の世界観により可視化し発信していくものだ。表現手法は固定せず、ワークショップでも、SNSを使った個人完結型の発信でも、アーティストではない「素人」の創作物を「それらしい額ぶち」に入れて「それらしい解説文」を添付した従来の権威をパロディ化したものであってもよい。多様な価値観に基づく自由な発信が、すべての人に平等にアートという場を開放すると推察する。その受け皿として、既存の美術館が従来の知見を新しい価値観に提供するとき、「地域社会の構成員である個人」から必要とされる存在になると考える。

謝辞

このプロジェクトにご協力いただきました岡山県立美術館の皆さま、アンケートに回答してくださった学生の皆さま、ワークショップに参加してくださった皆さま、ご指導くださった大橋 功先生と桑原敏典先生をはじめとした岡山大学大学院教育学研究科の先生方に深く感謝申し上げます。

【参考資料】

- 総務省統計局、『人口推計(平成29年10月1日現在) - 全国: 年齢(各歳), 男女別人口・都道府県: 年齢(5歳階級), 男女別人口-』(2021年1月25日 閲覧)
- 文化庁、『2. 博物館数, 入館者数, 学芸員数の推移』(2021年1月21日 閲覧)
- 文化庁、『文化に関する世論調査』, 令和2年3月 (2021年1月21日 閲覧)
- 文部科学省、『社会教育調査/平成30年度 統計表 博物館調査(博物館)』(2021年1月25日 閲覧)